

広島大学総合科学部報

飛翔

第91号

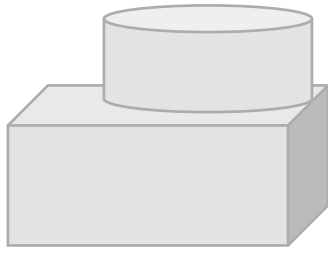
研究室紹介

輝いている人

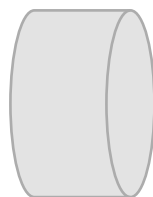
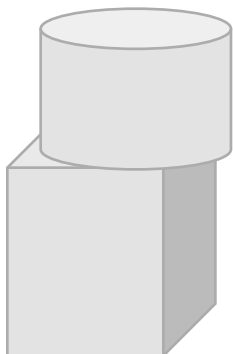
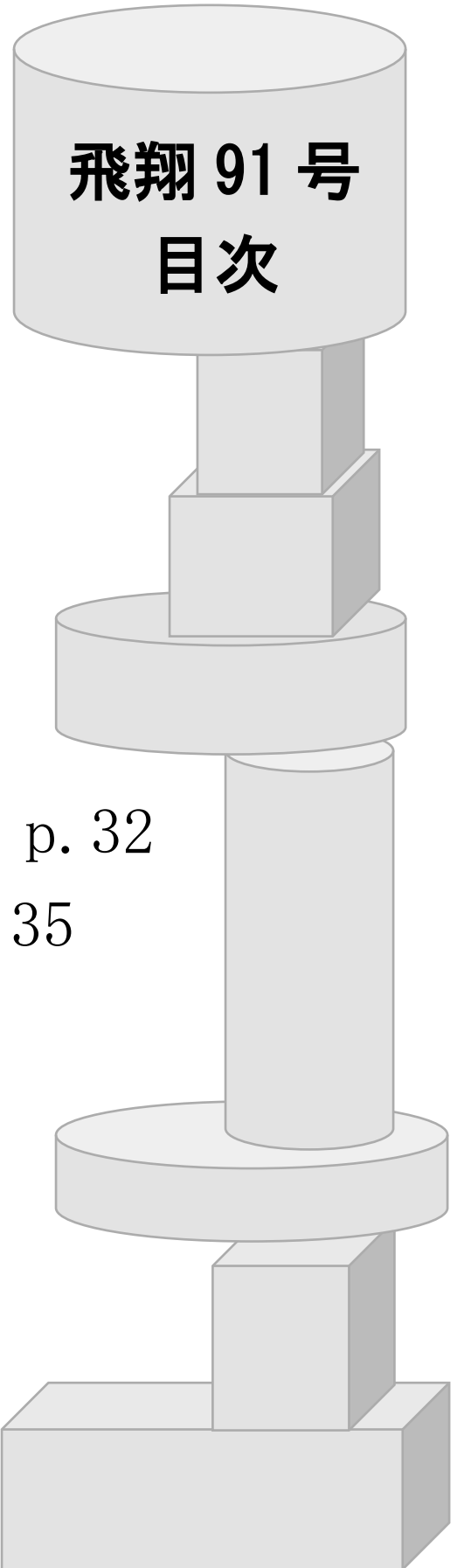
OG紹介

特集

頼りにしんさいー同窓会から



巻頭言 … p. 2
研究室紹介 … p. 5
輝いている人 … p. 25
OG紹介 … p. 29
特集 … p. 31
頼りにしんさいー同窓会から … p. 32
review × review … p. 35
飛翔な日々 … p. 37
編集後記 … p. 41



巻頭言

長田 浩彰

(大学院課程教育担当副研究科長)



新入生へのメッセージ 「私にとっての大学での生活」

総合科学部・総合科学研究科の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。昨年

度から大学院課程教育担当の副研究科長をしている関係で、巻頭言を書くことになりました。社会探究領域・地域研究領域の長田浩彰です。皆さんが入学した学部・大学院の特質については、オリエンテーションを経て、既に知識として皆さんの頭にインプットされていることでしょう。学部1年生には教養ゼミ、総合科学へのいざない、総合科学概論を通じて、大学院博士課程前期の新入生にはコア科目を通じて、自分が専門としていく学科以外を学ぶ人びととの共同作業が設定されています。その理由は、この学部・大学院が、教育・研究の両面で文理融合や学際性を目指そうとしているからです。

ある一つの問題について、一つの学問分野からだけでは解決できない問題が社会には多々あります。例えば、震災からの復旧・復興というテーマを考えてみましょう。そこには、倒壊した建造物の撤去や再建の際の震災に強い建造物や町の設計、実際の施工といった物質面での復旧・復興だけでなく、その間の住民への経済的支援、医療や教育面での援助、雇用の創出、精神面でのケア、壊れたコミュニティの再建など、

そこに住んでいた人びとの生活の再建も必要となってきます。様々な専門家たちの協力が必要なのです。総合科学部・総合科学研究科は、自分の専門をしっかり持ち、隣接諸科学にも明るく、協力して問題解決を模索出来るような人びとを育てたいと考えています。

ただ、そんなに大それたことでなくても構いません。自分が専門としない他の分野についても少しは知っている、ないしそんな他分野の専門家たちと協力して研究してみた経験がある、ということとは、これから社会に出ていって大いに役立つ経験です。特に学部1年生の皆さんは、これからの1年間は、一方で自分が専門としたい学科に必要な基礎教育を押さえるだけでなく、パッケージ科目や領域科目という教養教育内の様々な授業を受講して、視野を広げる努力もしておいてください。すぐには、そして直接には役に立たないような知識だと思っても、これからの長い人生でいつかきくとあなたたちの生活を豊かにしてくれるもの、それが幅広い教養なのです。専門分野を深めるだけでなく、人としての幅を広げることが、これからは求められています。

前者は、仕事という形でこれからの生活の糧につながるのに対して、心の糧を与えてくれるのが後者です。24時間戦えるサラリーマン戦士なんて、もう流行らないですよ。そうでなくても疲れて心が折れそうなきとき、あなたを救ってくれるのは、専門的知識よりも、昔読んだ詩や文学書、歴史書や哲学書のフレーズかも知れません。

そうそう、その意味で英語力の保持増進と並んで、もう一つ別の初修外国語の習得も大切です。英語学習からは中々逃げられません。好むと好まざるとに関わらず、英語は母語の異なる人びとがコミュニケーションを取るためのツールとなっていますから。だからといって、日本語を捨ててしまつて英語一辺倒でいい、というのも極論でしょう。我々には、母語としての日本語とコミュニケーション・ツールとしての英語は、共に大切なものですよ。さらにもう一つの言語習得というのは、先ほどの話の続きで言えば教養ということですよ。想像してみてください。海外からの旅行者が困っていたときに、あなたが何か手伝つたり助けたりすることがあるとしましょう。もちろんあなたは英語で話しかけるでしょうが、

あなたが習った初修外国語がその旅行者の母語だとわかったとき、たとえ単語だけでもその言語を織り交ぜて話してあげると、相手がどれだけ喜ぶかということを、想像してみてください。逆にあなたが海外で困つて、助けてくれた人が片言でも日本語で話しかけてくれたら、どれだけ心強いかわ（もつとも、海外でやたらと日本語で話しかけてくる現地のヒトには要注意デス）。そんな偶然は中々ないかも知れません。それでも、教養が人の暮らしを潤いあるものにしてくれることは、何となくわかつていただけでしょうか。

さて、ここからがようやく表題の中身です。1979年、私は文学部史学科西洋史学専攻に入学しました。最初から決まっていたのは、大学で専攻する分野だけでなく、史学科の学生が履修する第1外国語もそうで、ドイツ語でした。さらに第2外国語も選択必修でしたから、フランス語を選ぶ勇気のない私は英語に逃げました。逃げたはずの英語の指定クラスで、教員は「鬼の××」と呼ばれていた人でしたが、1年生後期には、毎週20ページ前後の予習がノルマでした。授業では逐語訳ではなく、その部

分部分の要約を説明することが求められました。授業で何冊テキストを使ったかも知れませんでした。今の時代からすると大いなるむちゃぶりです。これで英語力がついたとは思いませんが、一種の達成感を得ると共に、英語を大量に読むことへの恐怖心や嫌悪感は薄らいだのだろうと思います。

英語と違ってドイツ語の方は、積極的に勉強しました。それには訳がありました。1年生の夏休みに、同じ専攻の4年生の先輩が、西ドイツに留学したのです。今と違つてあの頃は、留学は一般的ではありませんでした。調べてみると、『地球の歩き方』という旅行ガイドが初めて2種類で出たのが1979年でした。学生の海外旅行ブームもまだなく、留学なんて高嶺の花といった頃でした。その先輩は、文部省(当時)の学生国際交流制度の派遣学生として、給付型の奨学金(渡航費と滞在費)をもらいました。タダで1年間、海外の大学で学べる手段があることを知った私は、自分も単純に行つてみたいと思つたわけです。念願叶つてその奨学金をもらえたのは、修士2年の時でした。広島大学と交流協定を結んでいたのは、当時はテュービンゲン大学だけで

したので、その歴史学部に留学しました。1477年創設のこの大学も、ヨーロッパの古い大学と同じで特定のキャンパスを持たず、町の中に学部が点在し、町自体が大学という「大学町」でした。

今のドイツの大学での状況は変わりましたが、当時は修学年限も授業料もなく、入学式も卒業式もなく、学生は大学入学資格試験の成績で各大学の学部に学籍登録を申請し、認められれば大学生活を始めました。そして学期ごとに学籍登録を更新し、必要ならば大学を替えて学籍登録をし、ゼミ修了証書を集めて中間試験をクリアし、より上のランクのゼミを受け、文学部系の学科では修士号を取得するのが大学を「卒業」するということでした。マイスターのところを渡り歩きながら修行する、中世の遍歴職人のような大学生活ですね。私はドイツの大学を「卒業」したわけではなく、合計2回(もう1回はケルン大学)、それぞれ1年ずつ学籍登録し、自分の研究テーマとして選んだ19、20世紀のドイツ・ユダヤ人の歴史について史料集めに奔走しただけでしたが、そんなドイツでの学生生活を少し経験することが出来ました。日本での常識

がドイツではそうでないこともよくわかりました。図らずも、結果今では教育・研究を生業としています。

人生にはあらかじめ用意された解答があるわけではありません。これからどんな人生を送っていくか、皆さんはこの学部・大学院であれこれ考え、試していただくいい。